

論 說

防空計畫の應急と恒久

奥井復太郎

太平洋を廻つての危機が漸く深刻となるに連れて俄然國內防空計畫も本腰にのつて來た。市街建築物の防火改修もそれであれば近頃の避難調査も同じ性質のものである。共に従來の幾分は形式的な防空演習に較べて著しく眞剣味を増してゐる事は事實である。之れが今次歐洲大戰の教訓である事は云ふ迄もないが、擬て防空計畫の實施となると問題は決して簡單では無い。殊に木造建築の密集してゐる我國の都市に於いては空襲の好餌たる事、火を睹るよりも明かであるが、一朝一夕に完全な防空計畫を樹てる事は不可能と云つていゝ。茲に應急對策が問題になる理である。

防空計畫とは一朝事の起つた場合に敵空軍の襲撃から安全に脱れる方法であつて第一は敵機の來襲を全然無からしめる事が根本的である。東京を中心として見れば、東京の上空に敵機を飛來せしめない事で、之れは敵空軍の基地の問題と我國防空兵力の問題とに關して來る。空襲が不可能だと云ふ事は最も效果的な防空措置である。併し果して完全に空襲から防ぎ切れるであらうか。此の場合にも大編隊の空襲は不可能でも少數機の空襲は何んとも云へないと考へる事が出来る。其處で第二の方法は敵をして空襲しても無駄である事を悟らしめる事である。つまり空襲價値を極度に低下せしめる様に措置するのである。空襲して見ても効果が無いと云ふ事は敵空襲を防ぐ一方法である。勿論、空襲の目的目標は一樣ではない。飛行場もあれば重要官廳もあり、工場地帯もあれば港灣鐵道もある。従つて空襲の最終目的は抗戦力喪失にあつても、其の爆撃目標は決して一樣ではない。ロンドン空襲に利用されてゐるかの様に傳えられてゐるが、音響彈の如きに到つては別段、破壊そのものが目的でないとするれば、其の目標とする所は、まさに不安化せんとする住民の心理状態だと云ふ事になる。其處で空襲價値の低下措置としても色々に分れるが、何と云つても種々の目標が雑多に密集してゐる場合、目標として好餌となるものは無いであらう。政治も産業も學藝文化もありとあらゆるものが集中してゐて、國民自體を、此の中心に萬一の事があつては……と思ふ心理を懷いてゐる様な場合こそ、空襲者にとつて空襲價値の最大なる場合である。

之れが防空計畫の一對策として機能的分散論の生ずる所以である。事實、過大都市論や國土計畫

論が指摘してゐる様に東京又は其の他の大都市に日本國力の中樞機能が集中し過ぎてゐる。従つて幾分なりとも之れを分散せしめる事は防空計畫上當然の事と云はねばなるまい。此の分散は必ずしも重要物それ自體を分散せしめる事のみ意味するものではない。軍艦では開戦に先立つて甲板其の他の露出面に於ける可燃性物の撤去を行ふさうであるが都市防空に於いては、それ自體は重要ならざるもイザと云ふ場合、邪魔になり、或ひは混亂の源となる恐あるものは豫め撤去して置く方が便利である、之れと同じ意味で防空措置にも重點主義がある。一人が其の所有の家財に執着して非常時に他の人々の效果的な活動を妨げる場合は、巷間、火事場などでも良く見受ける行爲である。都市空襲の場合に於いても同様で比較的重要なならざる建築其の他の防衛に狂奔して重要施設や建築の保全の障害になるが如きは大局的に考慮を要する點である。自分の家は焼かれて了つても工場とか官廳とか或ひは信仰の中心とかと毅然として残つてゐたならば恐らく心強い感を持つてであらう。今日では空襲目標の第何番目に「信仰の中心」といふものが置かれてゐるさうであるが、誠に尤もな事である。一般市民の木造住宅は、成程、生活の本據として吾々には大切極まるものであらうがさう云ふ本據を壊滅した焼跡から灰のなからから幾度となく再建してゐる日本國民の強靱なる生活力は相當高く評價されていゝのではなからうか。焼跡に幾度となく少しもひるむ色なくバラツクにせよ再建して行く市民の再起力があれば、之れこそ空襲價値の最も少ない對象と云はねばならぬ。故に應急的防空對策は何處までも主眼が重點に置かれ、市民は之れに即應しての心掛や

覺悟が無ければならぬ。市民の訓練や覺悟が不充分だと緊急時の指導者に相當の權力を賦與する必要も出て來る。

二

勿論、分散論に對しても再考すべき餘地はある。分散化された各單位は、其の儘では一應、それ自體が弱化し、攻撃に對して微力となる恐がある。昔から勢力を分散して敗れた例に乏しくは無く、微勢も集合して強力となつた教訓も多い。又分散形態は相互の連絡が遮斷された場合に最も不安を感じる。殊に中央との連絡が斷たれる場合には、孤立化によつて可成りの不安と混亂とが生ずるものと豫想しなければならぬ。勿論此の爲めに連絡系統の二元化に努める必要がある。同時に分散化本來の趣旨である地方自立性の體系的強化によつて此の混亂から逃れる萬全の工夫を凝さねばならぬ。

其處で本稿の當面の目的とする問題に達する。防空計畫、殊に都市防空計畫が完全に恒久的な基礎で實現されてゐれば問題はないが我國の現情は凡そ之れと正反對である。従つて危機切迫と共に應急對策の樹立が必要である。問題は應急對策を遂行するに出來るだけ不必要の混亂や刺戟摩擦を少くしようとする云ふにある。之れが當面の大問題である。先づ混亂刺戟となる可き重要點を考へてみよう。

建築物の防火改修、防空壕の構築等に就いては問題はあるまい。資材勞力の有無を問題にする向きもあるが、之れは茲で云ふ混亂や刺戟の觀念には入らない。次に住宅庭園空地の特別使用に關する件がある。一部の地域が破壊され、當然即時には居宅喪失と云ふ現象が生ずる。其の罹災者の爲めには一刻も早く對策が講ぜられねばならぬ。例へば小學校とか寺院とかの平生人の居住してゐない建物が利用されると共に場合によつては一部人士の邸宅の開放利用も必要となつて來る。都市防空計畫としては當然住宅調査が行はれて然かる可きである。庭園空地は應急的對策としては防火地帯として保持する必要があると共に防空壕敷地としての提供を求め、或ひは直ぐ間に合ふ問題では無いが菜園化の必要もあらう。所で斯くの如く個々市民の所有利害に直接關係して來ると問題は決して簡單でなくなる。殊に防空帶設定による幅員の大なる防空綠地や避難路の設置といふ問題になると土地及び家屋の所有者ばかりでなく居住者にも可なりの影響を與へる事になる。直接利害關係者の打撃や其れによつて生ずる迷惑又は不平が私益的だと云つて了へばそれまで、あるが、又非常時戰時は平時とは違ふとは云へ、一時的にせよ家を失ひ土地を離れなければならぬ者は、非常に大なる打撃を受けるのである。土地家屋の所有者には經濟的利害が重からう。併し自らの土地家屋に住んでゐない人間にとつても「家の觀念こそ最も貴重なものである。今日一方からは盛に唱へられてゐる家族制度や郷土主義は結局「土地」と「家」とに其の具體的表現を求めてゐる。門とか柱とか庭とか云ふものは、家なる觀念の具體的素材であつて、茲に人間の最も基礎的な集團生活の素

材がある。故に土地から離し「家」から逐ふ事は非常に大なる精神的犠牲を要求する事でもある。舊體制的の考方だと非難せられるかも知れないが、其の土地なり「家」なりが過去の致々營々の勞苦の結果であつたりする場合は、尙ほ問題が辛酷である。

若し土地及び家屋の問題に「家」の物的方面があるとすれば、避難計畫は正さに其の精神的社會的方面である。英國の實例でも知られる通り、老幼婦女の避難は「家庭」の破壊だと云ふ非難を有力にした。之れも事實其の通りである。主張者は云ふであらう。一朝戦時ともなれば親子が離れ夫婦が別れる事は止むを得ぬ此の場合「家」よりも「國」の觀念が優先すべきであると。成程其の通りである。今日の時局、今猶ほ個人我に固執した考が決して少くないのは憂ふ可きである。例へば先年來の防空演習、燈火管制にしても、いづれも協力共同して事に處するのが其の建前であるのに、自分の家は自分丈けの力で處置するからやかましく云ふナと云ふ態度があつた。今度の防空避難にしても子供が可哀相だ、死なば親子諸共だとかいふ理由で批判的な態度をとる人々が少くない様に傳聞してゐる。親子夫婦の情としてみれば尤も千萬であるが、前條にも述べた様に國が國の利害に於いて要求するのに對して私愛の念に行動を誤るのは一應反省せしむ可きであらう。

併し、理窟はさうであつても、他方一國社會そのものの存立及び運営が多分に人間愛親子愛を動機とした幾多の積極的行動に依存してゐる限り一方では認め乃至は獎勵し乍ら他方では之れを弊履の如く捨てゝ顧みぬと云ふ態度は決して良き方策とは云へない。公益優先は間違のない規範であ

る。併しこれは私益を徹して公益に奉任すべきものでなければならぬ。「私」がどうなつて了つてもいゝのではない。何處の「私」にせよ國家社會が何等かの形態又は意味に於いて要求してゐる機能に「私」として結びついてゐるのである。勿論國家社會が要求する仕事は時と場所又は時勢に應じて異なる。併し如何なる場合に於いても「私」が失はれて了ふ事は、直に「國家社會」内に於ける一人としての連繫を絶つ事である。それでは全く空しくなつて了ふ。「私」を徹する事によつてはじめて公益に奉仕し得るのである。故に私情私愛の故を以つて非國民的と速断する事は最も危険多き妄断であると共に其の反面、我が子、我が夫を「國のもの」と感へずに、ひたすらに私愛の境地に溺没してゐる事も亦誤である。

三

斯くの如き事情に就いて見ると都市防空の應急對策は可なり難問題を含んでゐる。勿論非常緊迫の事態は其の強行を可能ならしめるであらう。又一般市民も克く之れに耐えるであらう。併し人間の性情が一瞬にして完全に變化し終らざる限り、抑壓せられたる性情は何等かの機會に於いて爆發をする。英國兒童の避難事業は一方からは成功と目され、他方からは失敗と判定されてゐる。勿論かうした劃期的な仕事は、さう一〇〇%に成功し得るものではないが、英國稀れに見る全國的愛國の至誠至情の裡に行はれたと云ふ此の難事業も、漸く日がたち、且つ豫期に反して獨逸空軍の來襲

を見なかつた爲めに、漸く人心の緊張が弛緩して來ると共に幾多の問題を惹起するに到つた。前に見た愛國的感情の舞臺が廻はると喧騒裡の不平失望の舞臺となつた。都會と農村の生活風俗習慣の相違階級身分的の相違は決して簡單には消失し難いものである。緊張時にはさうした差は消滅して國民本然の姿に戻る事があつても緊張感の薄れると共に個人差の再現するのも當然である。従つて階級とか身分とかゝ兎に角く云へる場合でない事を認識せしむる必要があつても、前述した理由によつて、私を徹して全體に攝取する方法を講ずる方が更に賢明と云はねばならぬ。

茲に於いて、緊急時に於いて、緊迫感の下に遂行される應急策が、どうしたならば緊迫感が解消した後、に於いても問題を惹起せしめず、に圓滿なる處理をつとける事が出来るかと云ふ問題を考へる必要がある。

之れが爲めには結論を先きに云ふならば、應急對策は恒久施設の體系裡に求められねばならぬと云ふ事が肝要である。應急對策が全然別のものでなくて、恒久施設の體系に即した應急策でなければならぬ。換言すれば應急對策の施行は恒久施設の實現の方向へ一步を踏み出すものたる必要があり、恒久施設の體系は應急對策の生み出した結果を自己の體系に吸収し得るものでなければならぬ。

或ひは論者は反問するであらう。應急對策すら猶ほ判然とせぬ今日、確乎たる恒久施設の體系が有り得るか。尤もな反問ではあるが、應急對策の困難と恒久施設體系樹立の困難とは全然事情が

違つてゐる。計畫原理に於いて説明せらるゝ様に計畫の實現には計畫領域に就いての或る程度の廣さを計畫期間に於いての或る程度の長期とを必要とするものである。年度計畫は大抵我々の計畫的干渉に服さない客觀的事情に制約されてゐるものである。前年度の資本投下及び最近の收穫が前以つて殆ど一〇〇%まで生産、商品流通、輸出入、豫算、信用等々の領域に於ける次年度の經濟を決定する。一ケ年内での現存生産諸力のヨリ有效な組合せを目的としての之れが新組織の可能性は極度に限定される。その可能性は五ケ年の期間ならば既にとう遙かに大であるが、十ケ年乃至十五ケ年の期間があれば一著しい蓄積の存する場合には一實に莫大なものでさへある。だから天才的組織者にとり自由なる創造的構想力を展開すべき機會は特に綜合的計畫に於いて大であり、五ケ年計畫に於いてはヨリ尠く年度計畫に於いては零に等しむ。

應急對策と恒久施設との問題性質の相違は斯くの如くである。特に計畫が長期間に互る場合には多分に教育的効果を併用する事が出來、従つて協力への要請が可なり有望となる。關係者が計畫に積極的に協力するか否かは既に述べて來た所によつて見るも計畫遂行上頗る重要な條件となる。應急措置には之れ等の諸條件を缺いてゐる。其れ故、恒久施設體系の有無は應急措置の當面的難易を直に決定するものでは無く、恒久施設體系は一つの傾向裡に把握され得る可能性もある。國土計畫の恒久的體系が何んであるかに就いては頗る慎重な議論もある様であるが、國土計畫なるものゝ觀念が今日の經濟體制の傾向裡に捉へられる點から見れば、國土計畫そのものは一定の國によつ

て違ふのは當然であるが、各國について見れば一定の方向と性格を示してゐるといふのが私の持論である。その一端として私は國土計畫の分散的體系といふ事を常に述べてゐるが、若し之れが是認せられるならば、又實際問題として大都市問題は國防經濟體制裡に國防都市として分散の必要が痛感されてゐるが、此の立場から云へば分散的形態に恒久施設の計畫が置かれる理である。従つて私の云はんとする應急対策が恒久的體系裡に收められる可しと云ふ事は、分散的形態の下に設計された國土計畫體系に現在の應急措置も融合する必要があり、國土計畫體系が、その方向に應急措置を指導する必要があると云ふ意味である。

四

前項に列擧した個々の問題に就いて見れば、防空壕、防火改修の問題は暫く措くも邸宅庭園空地及び防空帶構築の問題は地方計畫體系に於ける大都市疏開の問題である。市街録地の問題である。ユムミニニティー設計の問題であり、保健市街地區の問題でもある。疏開方法の實體を爲す、人口の移置は都市機能分散論に基くものであり、工業分散論の要請する所である。故は應急対策として行はる可きものは、之れが行はれた後、直ぐ其の後を受けて之れが恒久的合理的措置に移さねばならぬ。防空都市が完成すれば何にも全部の子女を必ずしも市外遠方に待避せしむるには當らないかも知れない。人口の分散疏開は職業、文化の地方的配置によつて家族單位で成立せしむる事が可能とな

り従つて今次計畫された様に親子夫婦が一時的にせよ別離せしめられる必要も無くなるであらう。或ひは假りに市街地居住の子女が空襲時に際して遠く市外に避難を必要とするが如き場合にも避難先の地方に平生から設備を置き接觸を計る事も可能である(例へば夏季又は其の他の季節的鍛錬修養場を設けたり保健地域を設定したりキャンプ制度の完備等)つまり市街の特定地區を郷村の特定地區に結びつける方法が平生から工夫されてゐて毫も差支ない。都市と郷村との接觸が要望され文化的交流が希望される今日、かゝる計畫は防空目的以外にも必要と思はれる。郷村の不足勞働の補給にも資する方法が工夫されよう。

要するに斯くの如き恒久化の方策が確立すれば應急対策が生み出す幾多の急激な措置も其の後に續く激甚な苦痛を嘗めずに済ませ得るのである。都市に残留する家族も其の子女の避難先きが平生から行き來してゐる馴染の土地であれば安心して委せておけるであらうし、必要に應じては交替に之れを見舞ふ事も可能であらう。一方一部の市民を郷里又は何等かの關係ある地方に歸還せしむる事も、その事丈けを游離して考ふれば頗る過激な手段方策とも思はれるが、物資施設機會の地方的分散を計る事によつて是等の人々の厚生上毫も支障なき事を確保し得よう。勿論、此の計畫は決して茲で説明する程簡單なものでない。併し若し吾々が都市防空の應急対策として相當徹底的手段をとる事が必然化してゐるとすれば之れによる衝撃を長期に互つて深刻ならしめざる方途を選ばねばならぬ。其の意味に於いては應急措置が單に應急のものとして游離する事が頗る危険で

ある。應急措置は直に次の手續きに引繼がれて恒久對策の體系裡に包攝されねばならぬ。

第五列の活躍や謀略の踏梁を云々する時一時でも國內人心に不安や動搖を與へる事は最も慎しまねばならぬと時に來る可き不測の變が若し其の性質上乾坤一擲と云ふが如き壯大豪快のものでなく極めて消極的な破壊戰封鎖戰ゲリラ戰の性質を帯びたとすると國內人心の緊張を確保する事は決して容易でない。之れに照合すれば應急措置の緊急性を一時も早く解決して之れを恒久的平時的基底に移す事こそ計畫者の最も主眼とする重點でなければならぬ。此の意味で私は地方計畫法の今議會不提出を最も遺憾に思ふ者の一人である。

(昭和十六年一月末日)

